

79 姥捨山（口）（柴折り・薩摩の難題）

お婆さん方でもお年寄りでも女でも、六十一歳になったら山に捨てに行きよったそうですね。その時、子どもが山に連れて行つてからね、このお婆さんは、もうこの子が道迷いしたら大変と、帰り道に木の葉を折つて置いて、ほいで、といといといとい山奥まで行つて、だから、またこのお婆さんが、

「私が木の葉を折つてあるから、迷わんように行きなさいよ」つて。親子の情はあるけど、六十一歳になつたらば、お婆捨て山に捨てられたつてね。その捨てられたお婆さんの理由がね。

また、ある子どもさんは、お婆さん連れて行つて捨てては可哀想だからゆうて、床、家の横の下に穴掘つて、お婆さんは、巡りに来た人が来ても、

「お婆さんはいないよ、持つて行つたよ」つて、下に籠めておいてしたからね。

その時ね、お婆さんが、お婆さんそこに御飯も上げ

てある。またこの人も、何といふかなあ。雌鳥は卵を産むでしよう。『雄鳥の卵持つて来い』つて。こう言われて。これにこう言われて。また、何とか、『灰で綱縋つてきなさい』つて。お婆から習つたんだよね。このお婆さんは自分のあれだから、またこのお婆さんが、灰で綱縋うてくれつて言い付けられたからどうしようかねえと心配するうちに、

「これをね、瓦の上に縋つた綱を焼いてごらん。すぐ綱になるから」と、お婆さんに習つたらね。

「まあ、お婆さんは偉いからこれ捨ててならん」言うた。

字糸洲 神里力マ

類話

字照屋 前川次郎助

字糸洲 中村カツ

字南波平 伊集朝助

字福地 大城タツ

字山城 仲門銀助